

推定・永代美知代作「女子大学英文科出身 新夫人の打明話」

『中央新聞』明治42年10月6日～11月17日、全30回)

付・「新夫人の打明話」を読で女性の素質を思ふ」(静雄)(全2回)

- (1) 10月 6日 陳腐圧制の女子大学
- (2) 10月 7日 君の家を借て置たよ
- (3) 10月 8日 眼の前の新生活
- (4) 10月 9日 拝借物の火鉢と洋燈
- (5) 10月10日 可笑い事、口惜い事
- (6) 10月12日 精神的恋愛の正体
- (7) 10月13日 結婚前後の男の態度
- (8) 10月14日 恰で私は菅原の八重
- (9) 10月15日 際限のない失敗談
- (10) 10月16日 飯を焚く天才
- (11) 10月17日 五月蠅い訪問客
- (12) 10月18日 第一回の支払日
- (13) 10月20日 自我を没する苦痛
- (14) 10月21日 生活の上の圧迫
- (15) 10月22日 何の為に結婚したか
- (16) 10月23日 呪はしき恋人
- (17) 10月26日 聾の婆やと筆談
- (18) 10月27日 赤ん坊つきの下女
- (19) 10月28日 我儘過ぎて奇抜な下女
- (20) 10月30日 悪むべき慶庵の手段
- (21) 10月31日 嬉しかつた長火鉢
- (22) 11月 6日 吉原から帰つたんだ
- (23) 11月 7日 カアテン、レクチャー

※本文は(廿二)となっているが、(廿三)の誤り

- (24) 11月 9日 浅間しい男子の本能
- (25) 11月10日 内證でする無理算段
- (26) 11月11日 愈々質屋の御厄介
- (27) 11月12日 辞職した当座
- (28) 11月13日 俺ァ牛になる
- (29) 11月16日 離別? 子供は?
- (30) 11月17日 罨に懸つた様な運命

— — — — —

○「新夫人の打明話」を読で女性の素質を思ふ」(1) 11月18日

○「新夫人の打明話」を読で女性の素質を思ふ」(静雄)(2) 11月19日



女子大學

英文科出身

新夫人の

打明話(一)

# ▲陳腐壓制の女子大學

私が學校に在りました時分のことは、どうぞ事をもお話しなさらないで下さいましな。

あの頃のことをお話しすると、随分長くもなりますし、それに、主人との關係も初めつから洗ひざらひ云はなきやなりませんのですもの、幾ら私が結婚してから後の経験を打明けするにしましても、昔のことを思ひ出すのは、それでも取かしくない事も御座いませんわ。

勿論、主人との關係を全然秘密にし度いと申す譯ぢやありませんのよ、だから色々お話ししてらうちには、乾度お喋りして下でせうけ共ね、まア一ヶ所に纏めて昔の現實を暴露し度くないのです。又あの頃をお話ししたつて、それはつまり私共二人が長い間甘い夢を見合つてゐただけの事ですから、變なものになつちまつてお聞きになつても、些少も面白くないに定つてますわ、面白くない事を私が一人で面白がつて居るよりは、そんな事は抜きにして、さつさ本文の経験談に入る方が可いと思ひますの。

それと申しましてもね、私のお話はよく世間で良妻賢母とか云はれる、あゝした方々の談話とは全然調子が違つて居ますのよ、それで、何でも彼でも皆な「自分」と云ふ眼鏡に映つたことを、自分勝手な考に當て替へて、その結果を正直にお話するのですから、正直にさへお聞き下さいますなら、それで私の性格や境遇が好くお解りでせうと思ひますの、従つて私と同じ時代の同じやうな経験の女のこととも乾度了解なさる事が出来ますわ。

こんなことを、此様した調子でお話しすると、世間で乾度私の事を生意氣だとかお噂だとか有仰つて、悪く誤解なさる方があつてせうそれは私もよく知つてますけれども併しまア仕方がありませんわ、だつて私に氣取つて上手に云ひ廻したりなんぞ、左様した事は大嫌ひで、それに又第一一柄にないんですもの。

ですけ共ね、一つだけは是非お断りして置きたいことがありますの、他でもありませんが、私がこんな打明話をするやうになつた動機とか、これからお話しやうと云ふ事件の標準なんかは、事實私自身に修行して、而して結論をつけた事はかりだど云ふ事です、それから又種々大膽なこともや、露骨なことも申しますでせうけれど、それは決して女子大學で教はつた譯ぢやないんですの、よく世間では女子大學の事を、女子教育の最高府だとか、近代的女性の淵藪だとか、随分賞讃されて居るやうですが、それが第一の大間違で、私なんぞに云はれば、女子大學程陳腐な、壓制主義な學校は渺いと思ひます。

ですから時折有名な學生が出て、其人達は皆な自分自身の自覺で進んで行くのでして、決して學校の感化ぢやありませんわ。まアそんな事は兎に角として、ぢやアお話に掛りませうね。



女子大聖

英文科出身

新夫人の

打明話(二)

▲月の家を借て置たよ

十二月も押詰つた三十日の午後、新橋着の二等列車から降りたつた若い夫婦連れのがあると思像して下さい。

二人とも、餘り服立たない服装はして居ましたが、それでも何處かに初々しい處があつて、経験のおあんなさる方には、

「はよア、新旅行だな」と直ぐ呑み込めるやうな調子でした。男の方は大島橋の橋入りに、同じ飛白の書生羽織、中折のボンに汽車の煤煙がくついて居ました。

女の方ですか、ほよよ、それはまア如何でも好いぢやありませんか、二人が改札口へ出て来ますと、出迎の人波を押し分けて、速早く髪をかけた二人連れの青年紳士がありました。

「やア八島君、待つてたよ。」  
「あゝ有難う、待つてゝ呉れたのか。」  
「待つても待つても来ないもんだから、途中で何か變つた事でも出来湧いだんぢやないかと思つてね。」

「左様かそれは失敬、なに細君が頭痛を

やつたもんだから途中で一刻も休んで来たのさ。」

と私の方を見返りますので、私は此の出迎の二人を、主人の友達として昔から知つては居ますものと、二人の前で細君をどよ云はれるのは、それが初めてなので流石に耻かしくもあり極りが遅く、つい眞赤になつて了ひました。

まア兎に角と云ふので、お方達の御案内で私達はステーキシヨンの「つるや」へ入りました。前から準備がしてあつたのでせう、麥酒なんか出て居て、男はすぐ健康を祝すとか、新婦を祝すとか云ひ合ひながら、例のブロッソトです。殊に皮肉上手の安井さんは、

「今日は天氣が好くつて、總の勝利者の入京にはもつて来いだ。」  
など何處までも私を振くさせやうとなさるんです。それでもやがて眞面目になつて、

「家の方はね、お氣に入らないか如何か僕の見立てと借りて了つたよ。小石川に白山御殿町のね。眞木君の下宿近所なんだ。」

主人と同じやうに、今年出の眞木理學士は莞爾して、

「中々佳い家だよ、昨日大家に掃除させて置いた。君の荷物は僕等が先へ車で運び込むから、君は後から妻君と電車でやつて来玉へ。」

「世帯道具もこれから買込むんだよ。」  
「文學者の安井君に見立て、貰へば大丈夫だ。」

と二人は恰で自分の家でも持つたやうに私達をお客扱いにして、色々相談して被在やろんです。聞いて居ても解れしくつて涙が溢れるやうでしたわ。

「何だか色々御世話になりまして。」  
と私達二人が思ひ出したやうに頭を下げますと安井さんが、  
「何だ、友達の前へ手をついて禮なんぞ云つて、恰で藤村さんの『春』の中の人を思ひ出すね、はよ。」





女子大學

英文科出身

新夫人の

打明話(三)

# ▲眼の前の新生活

安井さんと其未婚妻土さんが、一足先きに荷物の準備をして小石川の家を云ふのへ發行やる、私は主人と一緒にあさから電車で参りました。恰度年末のことです。から、其の慌忙して居る事つたらありません、それでもやつこの事で、私達二人は隅つこへ小さくやつて並んで腰掛けました。街々の商店は歳暮大賣出しでもつて、赤い鬼灯提灯だの賑やかな陳列などに眼氣を見せて、見るからに人の心を浮

き立たせました、暫く田舎に静かな生活を営んだ私は物珍らしく見廻しまして、「何と云ふ賑やかいんでせうねえ。」とそつと主人に話しかけたが、主人から「何だ暫くの間に全然田舎者になつちやつたぢやないか。」と斯う云はれた時には最う心では別々の事を考へて、二人で斯うして東京の電車に乗つたのは、最う彼は半年も前、あれは丁度女子大學の卒業式の時だつた、彼の時は二人でそつと人目を忍んで多摩川の百草園へ遊びに行つたのだッけ。

ですけれどもね私は直ぐ、昔の夢から覚めましたの、だつて眼の前にはもう新しい生活が手を擡げて居るぢやありませんか。それと氣が付きました時にはね、私は直ぐ、これから行かうとする自分達の新しい家を想像して見ましたの。

「一体安井さんは何んな家を借りて下すつたのだらう。」

客間があるかしら、書斎は狭いか狭いか私は廣くなくつても好いから、自分の書斎が一つ欲しい。その窓の前に、二年でも三年でももの置があつて、西風の一株位あつても悪くない……

ほゝゝ随分の空想家でしたせう！  
その空想家がね、こんな事を考へて見ましたの。

「私は世間並の女と異ふんだ。新しい時代が生れて、新しい自我を感じたんだから、我ら八島を死ぬ程思ひく想つて、やつと結婚したんだからと云つて、何も全然八島の云ふ通りに盲従しないやつて可い、若し二人が衝突すれば那方かに正しい理があるの、それが何時も何時も八島にはつかりあつて、私に丈けないと云ふ筈はない、そんな時に自分が正しいと思ふ事は、どんな構は争つて飽き自分を買いて見せる——だが併し私は入塾の妻だ、家庭の主婦だ、家庭の事に就いては何一つでも八島を煩はす事ぢやない、其點では全然八島の個性になつても些少も憂念ぢやない——」



女子大學

英文科出身

新夫人の

打明話(四)

拜借物の火鉢と洋燈

小石川白山御殿は最う夜でした。

眞木理學士の下宿の近間は八島がよく知つてゐる筈なのですが、暫く歩いても發見らないややありませんか、最もね、私共は餘り周章で居て、番地を越り聞いてたかつたんですの、だもんですから最初には貸家札の張られてゐる家ばかり見當てにして探しましたの、まさか燈火のついて居る家へ、若しかして私の家でせうかと入つて行く譯にも参りませんしね、するうち何處かしら新体詩を朗吟する聲が聞えるんです。

「安井君？」

と大きな聲で八島が呼び掛けますと、

「あゝ八島君、此處だよ」

私共は宵月の中で出會ひました。

「又妻君が頭痛ぢやないかと思つて心配して居たよ」

「番地を忘れたものだからね、一体何番地だ？」

「左様だ！」と安井さんは頭をかくて「實は僕も知らないんだ」

はアはアと吾氣相に笑ひ合つて居るんです。笑ひながら、一寸した格子戸の前へ来ますと、此家だと云ふんで入りましたの。「眞木君は世帯道具を買ひに行つたから今に歸るだらう」

「フン左様か」

と禮一つ云ふんぢやありません、八島はさん／＼家の中を調べ歩いて、

「これが僕の鼻か」

とそれでも隠れし相でしたわ。

「何うも好い家が無くつてね」

「否、この位から結構ですわ」

安井さんの心切に對して、云ひは云つたものの私、玄關の三疊はまゝ當然として直ぐ隣りが八島の座敷兼書斎、その横手の三疊は夜だから解らないけれど、何にか陰氣な薄暗相な部屋なんですもの、今少し如何かしと家が有り相なもんだと思ひましてねえ。

八疊の中央に大家から借りて来た三分心の小洋燈がついて居て、これも拜借物の火鉢の火は乏しくなつて居ました、其處へ座つた時は應々氣持ちで何だか落着かれませんでしたわ。

「水は？」と八島が尋ね掛けましたので

私も急に氣がついて

「あゝ左様々々水道？」

「否、井戸ですよ、眞。路地を十間ばかり行くであります」

「あら左様」

水道なら好いに位で、水が遠くては困るなどは將へもつかぬ程、その頃の私はばんやりでした。

## 新夫人の

## 打明話(五)



## ▲可笑い事、口惜い事

農木理學士が荒物屋の小僧を連れて歸つて被來つたのを見ると、まるで狐の嫁入でした。二人とも背中に大きな籠をくしつ付けて、其中には色んな世帯道具が入つて居やうと云ふのです。

「炭屋とそばやへは寄つて置いたよ。」と云ひながら、籠から取り出した品々を玄關一杯にお並べになつて。

「これでまあ當分の一通りはあるだらうが、足りないのは二人で買ひに出掛けるさ。」

「ふん、其の機手古なものは何だい。」

八島は相續らず坐つて居て然う訊きます。

と、安井さんが解り切つたと云ふ調子で

「御飯煮しき、せいろう見たいなもんさ。」

「へえ、赤飯でも焚くのかい。」

「それは奥さんが御存知さ。」

所が實は私も其の使ひ方を知りませんで

したの。ですから後からのお話ですが、

その道具の中へ突然御飯を入れて置いて

上からお湯をよつかけて、大失敗をした

事がありました。だって私、家政科の生

徒ぢやありませんし、そんな事學校で教

はつた事ないんですもの。

炭屋が來ます。そば屋が來ます。火も生

りますし、お腹もよくなるさ、お客様は

二人共寝轉んで無駄話します。

「これでまあ夫人も出來たし、家も出來

たしだ、當分寢て居て遊ぶ支けの金があ

れば八島君萬歳だ。」

然う云ふ安井さんは早稲田出の文學士で

すのよ。何しろ皮肉屋で通つてゐるもの

ですからね、八島君だと笑つてばかり居

ましたつけ。でも細かい所へ氣のつく眞

木理學士が、

「だがね、道玄のは可い加減にして、早

く就職を促すと好い。」

と御有つた時には

「然う云ふ君は如何だい？」

と一本參る。

「む？むう、僕はまだ自分だからね。」

「ぢやあ世話しようか。」

「頼むよ、教育のない女でも好いから、

せめて持参金が五万円ばかりあるのを

ね。」

すると安井さんが、

「僕は一万圓でも我慢するから、イブセ

レ位談める奴が。」

などと、こんな話になると、男は何時で

も夢中になる事が出来るやうですのね。

八島までが一緒になつて、私が傍に居ま

すのに、今一度結婚でもしなほし度いや

うな事を、何の彼のど面白がつて申すぢやありませんか。

「なんて不真面目だらう！」

私が心中でさう思つたのも無理ぢや御

座いませんでせう、全く口惜しくもなり

ましてね。





女子大學

英文科出身

# 新夫人の

## 打明話(六)

### 精神的戀愛の正体

口惜しくなつた序に、いまだし立入つたことを話させて頂きます。

私はねえ、由來篤實氣質の嚴格すぎる家庭で育ちました上、同志社女學校へ送られて宗教教育を受けさせられました。またア云は、尼寺に閉籠められたやうな生活が、私の心を薄暗くしてゐたのは何れほどだか知れません。幼少ときの感化は恐ろしく一生にさし着くものを見て、その當時に教へ込まれた道徳とか思想だとか、然うしたものゝ女子大學へ入らして、色々と自由な讀書の結果、新らしい思想感情に激されるやうになりました。からも、まだ私の頭から脱け切らないで居たのです。

した問題に就ては、多少新しい考へが出来て居たのでせうが、振顧つて實際的の心持はと考へると、私本當に臆病で、小心で、兎てもお話にならない程でした。の。と云ふのも實は今になつたから云へる迄のこと、結婚前後は何うしてその世なれない心持を一種の理想にして訪つて居たので御座りますよ。

その理想が結婚するに直ぐ、恐ろしい變動を受けたのですもの、實際、驚いたり口惜しがつたりせずには居られませんでした。

戀愛は精神本位だと深くさう信じて居ましたものが、結婚によつてそれと反對の事實を見せられたほど、口惜しく感じるにはありますまい。取分け私は足掛け四年の間と云ふもの、戀愛に對して然うした理想を持つて居ましたでせう？さうねえ、丁度母が子供を愛し、詩人が天然を慕ふやうな心持、それが戀愛の中心だ位の薄弱な理想には異ひありませんでした。が、恐らく未婚の處女が戀愛に對して抱く純潔な理想と云ふものは、矢張りそれ位の觀念に過ぎませんまい。

私、大膽に申上げませう。私が結婚して、第一に驚くのは男の如何にも無作法で、動物的で、野蠻なことです。戀愛の正体は、何とも申上げやうのないブルータルなものです。女が若し處女でしたらば、誰でも一度はその恐ろしさに戰慄するだらうと思ひます。

私は餘り戀愛を買掛つて居ました所爲です、か、この覺悟の程度が非常でした。私は四年の間、入島から欺されて居たやうな持氣がしました。精神的に愛してゐた私の心に此上もない凌辱を受けたと思ひました。それはかりやありません。私は入島を憎いと思ひました。男全体が忌はしいものだと思ひました。

男……男……

「男に精神的な所があるか？」  
事實、私は然う叫んでも可いと思ひました。



女子大學

英文科出身

新夫人の

打明話(七)

結婚前後の男の態度

私此間、人から勧められたものですから、初めてあの名高いモウバツサンの「クローマンス・ライフ」を読んで見ました。

読んで参りますうちに、私は銀くもりました、まア何と云ふ大膽な思ひ切つた増寫でせう、併し、人生はあゝ云つた風かまつたくなんですから仕方御座いますね。

あの女主人公のデヤンヌね、幼い時から尼寺へやられて居ましたでせう。それが十七の時に初めて尼寺を出て、派出な暮しの父の家へ引取られて来ると、急に心持が晴々しくなつて来て、自然に現世の戀を辨へて来る處など、有聲に手に入つたもんだと、つくづく思ひましたわ。ですけれ共、何よりも私の心を打ちまし

たのは、結婚の夜の描寫でした。デヤンヌが第一夜に感じた、あの恐怖！動亂！私も昔のその時を思ひ出して、つい泣かされて了ひましたが、つまりあれですのね女が男を憎むつて譯は。

先づ結婚の前後で男の態度が變つて来る事を御覧なさい、結婚前には悉うでなく六ヶ敷さうな貌を、殊更にかつく六ヶ敷くして、やれ理想がどうの、永遠の戀がどうの、色んな理想を並べるのは皆な定つて男のする仕事です、女は決してそんな事を口にしないやせう。

そこへ行く女は正直なのです。凡ての感情を戀人に捧げて了つて、胸一杯戀人を想つて、理想でも何でも男の考よりはすつと實事に忠實にそつとして胸の奥深く藏つてあるんです。而して聲へはその理想をです、はつ／＼打明けたり實行したりしやうとするのは、如何したファン結婚してから後になりますわね。

すると今度は男の方から、自分が昔異面臭い貌をして口にした理想を、手もななく取消してかゝるや御座いせんか。女が男の事を思つて睡れない夜でも、男は何も彼も忘れて、ダン／＼睡るやありませんか、併しまアその位はまだしも。

「お前はもう乃公のものだ」  
此々に然うした態度をふり廻して、其の拔擢な事我儘な事、勝手な時だけ傍へよつて来て、お世辭を云つたりして置いて機嫌の悪い時になると、幾ら此方で話しかけても、知らん顔なんですもの、心細くもなり、憎らしくもなり、何故結婚したらう、一生戀で居た方がどんなに愉快で、そして美しかったかと残念で／＼でたまりません。

あと結婚後の男の態度  
あつた／＼程の情人？、またよくに愛忍冷酷な良人と變るんです、其の轉機はつまり、女が男に凡てを許した結果です。私の主人も矢張り左様でした。だが仕方ない、男は誰だつて然うなんですもの。





女子大學生

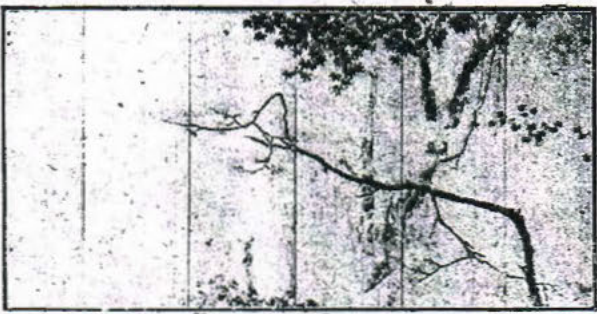
英文科出身

新夫人の

打明話(入)

▲恰て私は菅原の八重

臨分思ひ切つて男の惡口致しましたわね



ですけ共、今だからこそ斯うした惡口、不平を申されるので、其頃は如何して、たゞもう新家庭の理想とか、整理とか、計畫とか、然うした事に心をとられて、おち／＼落着いて考へてなんぞ居る暇は御座いません。

それに何と云つても新婚當座です。四年越しの戀が叶つて、一つ屋根の下に何懼りもなく一緒に居られるんですもの、ほゞ可成りスウスイトな事のないでもたからうぢやありませんか。

ですからそんなこんなにはまぎらされて下つて、不平の根本——例へば結婚の第一夜に感じた恐怖、憎しみ、夜一夜をわのゝきと涙に明して置きながら、其の翌日八島と顔を交して、おち／＼い氣持

の其の底に、「云ひやうもなく可憐しいやうな、眞母しいやうな心地もして、例は絶えず浪打つて、たゞもう調へなくいそいそして暮すのでした。

實際、私はもう、朝夕二人一緒に居て、御飯を一緒に頂けると云ふ、それが願しくて、事々に感謝したいやうな氣もすると云つた有様。まあほんと、夢中で居たんですのね。

それに又、私は前にも申上りました通り、幼い頃から學校の寄宿舎に入れられて、兎角家庭のしどなどへは掛け離れた養生活はかゝ致して居たものですから、ナア自分で家を持つて、何も彼も手一つに整理して行かなければならん立場になると、如何して可いのか解らない事だらけで、もうもう泣き出したいやうな事もありました、而して私は人一倍の理想家の空想家なものですから、家をもつたら彼様もしよう、此様もしようと徒らに理想ばかり高く、いろんな事をあれこれ空想して居ました丈に、今更自分の無能なのを情けなく、全く失望しきつて了ひました。

第一水を汲む事からして、生んで初めて井戸綱を持たうと云ふ私には、如何にしても、遠い深い井戸を汲むのは苦痛です又しても雪道を轉ぶやら、手桶の水を溶びるやら、見兼ねて八島が水丈だけは汲んでやるよと云つて、よく手傳ひ／＼して呉れました。

同一つ家庭の事については良人を頼む事やないも、ひそかに堅つて居た最初の考へは、直ぐもう空想になつてしまつたのです。

瀬戸物を洗はうとすれば、ざら／＼した糸敷きで手を切つて、だら／＼血が流れる、火を燃さうとすれば、マツチの一箱もすつて、一時間以上二時間かゝつても燃えろかす、終にすゝり泣きして居る八島が起きて来て、譯もなくもしつけて呉れるよと云つた有様、まるで私は菅原の入重でしたの。



女子大學生

英文科出身

# 新夫人の

## 打明話(九)

### ▲際限のない失敗談

菅原の八重どころか、失敗をお話しすれば際限もありません。

眞木理學士に買つて来て頂いた世帯道具の中で、使ひ方の解らなかつたのは、前に一寸お話しした彼の御飯蒸ばかりぢやありませんの、みそこしね、そら、お味噌をこす底みたいなのがあるでせう、あの使ひ方が如何考へても解りませんでしたのよ、使ひ方が解らないばかりでなく、第一名前も知らないんですもの、困つて了ひましてね、散々自分で考へた末、そつと八島に訊いて見ましたのよ、随分でせう、するこれ、八島も知らない、解らないから眞木君に訊いてよく使ひ方を教

はるやうにと申すんです。

ですけれ共ね、幾ら何でも女の癖に愛所道具の名前一つ知らないと言つては、如何にしても恥かしく、根が負け嫌ひの私ですから、たに其内には自然解つて来るだらう位に思つて、其儘訊かなくて、毎朝のおみおつけは、只ねえ、あたり鉢であつたばかりのをすく煮立てて頂きましたの、ほよとだつて八島も何とも云はないで黙つて頂くのですもの、東京のお味噌は製法方がぞんざいだから不味い位に思つてたんです。

所がね、或日眞木さんが起きぬけに來たと仰有るので、御一緒に朝御飯を蒸上げる事になりましたね、例のお味噌汁を出したんです、するさ一口お吸ひになつた眞木さんが、

「恐ろしくかすがあるんだね、奥さんあなたこしましたか」と仰有るでせう、

「こすつて如何？」

「みそこしがあるでせう、あれでさ。」

「アラ、私……」と云ひまして、ハツと氣がついて、

「あゝ彼の旅みだいな圓いもの？」

「驚いたね此奥さんは！」

「散々考へて解らなかつた奴か。」

八島がまた最初からの事を話し出して大笑はれよ。

それからまだねえ、御飯が大々敷くつてね、やつと火がもえついて「安心と思つてると、今度は眞黒焦げを造へて了つて毎朝毎朝氣をもむと云つた有様なんですの、ですからねえ、周章で了つていきなり其御飯を埃箱の中へおけ出して、又大急ぎで焚きかへ焚きかへしましたの。それでも矢張り焦げついて、其くせお米のまんまの處があつたりなんぞしましてね、いつでも茶色の御飯ばかり煮いて居りましたが、後に鹽やを醋ひましたら、「奥さん、これお醤油御飯をんでせう」と云はれて了ひましたの、迷やもね二つも三つもお焦げ御飯で一杯になつた屋入らずの中のお井を見ては、全呆れちまつたでせうよ。





女子大學

英文科出身

# 新夫人の

## 打明話(十)

### 飯を焚く天才

酒屋に入百屋に米屋に肉屋、皆な出入りの商人が定つて入つて、通帳でとりました。中にも入百屋は荒物まで商ひますので、何屋に何々を商ふものか、そんな事さへ知らぬ私は、

「入百屋さん、砂糖を持つて来て頂戴。序にお茶と饅頭もねえ」など申し、お茶は葉茶屋へ行かなければ無事、砂糖は饅頭屋は干物屋の領分な事など御用きよから初めて教はるのでした。

それに毎朝、

「今日は入百屋で御座います。」

斯う云はれると、今更きばかりの所で何も考へついては居らず、扱て何をさつたものかと、あれはれ考へても急に思ひつかぬので、内々ぢれ／＼して居る所へ又、續けて

「今日は入百屋で御座います、何か御用は？」とせき立てるやうに黄色い聲を出される、カツとなつて了つて、

「然うね、何があるの？」

「大抵におさつに、三つ葉にほまれん草、それから小松菜の上等が御座います。」

「然う、それぢやね、それ持つて来て下さい。」

「お戻ら。」

「然うね、五個つもあれば好いでせう。」  
幾ら買つてどの位あるんだか解らないので、入百屋から笑はれるだらうと思ふと、何でもかんでも早く注文して御用きを購して丁はなればならんやうな気がしますので、私は夢中で買つちまふのでした。

すると後から持つて来たのを見ると、分背物ばかり澤山で、どんなにして頂いて好いのか解らなくなつて、今度は又それで「苦勞、そんなに澤山あるんなら何ぞ買はなくてはなかつて、而して二個つも買へばよかつた、まあ今日はほうれん草のお浸しでも作へて、あとは又あしたの事にしやうと、うつちやつて置きますと翌日は最うしほれてしまつて、食べられさうもなくなつたのでした。

其所へ奥木理學士がいちつしつて、「買物をするにはね、先づ第一に價格を訊いて、それから注文するにしても必要なだけづゝしないと、こんな事ぢやとても家はもてませんよ」

と又來合せて被在つた安井さん、安井さんの兄さん、皆などれ／＼寢所を二つ見分しようかと、どか／＼無遠慮に寢所へ入つて來て、

「仕方のない細君だね、何にも知りやしないんだ、それでも此頃は御飯丈じは焦げなくなつたでせう、なんだまだ焦がしてゐるか、やりきれないか、僕なんか、十六歳にして既に飯を焚く天才が有た。あなたね女のやうぢやないね。」

「僕ア細君をもつたら寢所の仕事によく通じた田舎娘を買ふ。」

人もなげな惜い口をおきよなさる、私は根くなるより、いつぞ惜しくなりまし





女子大學

英文科出身

# 新夫人の

## 打明話(十二)

### ▲五月蠅い訪問客

憎い口をきかれると、つい腹も立ち、憎らしくもなりますけれど、根が皆な同じに無邪氣な氣風で、別に深い恩恵があつての事やありませんから、腹は立つても、ほんの一寸一時、本氣で怒り合ふんぞやない、皆其堪えりなんですの。其中でもわけて無邪氣で、云ひ度い事云ひの代りに、罪がなくて、私の好きなのは文學者の安井さんでした、安井さんには一つ上のお兄様がおあんなさいまして矢張り此の方も早稲田出の文學者、其新聞の文藝記者で被在いました、ですから

私はお兄様の方を盛さん、弟さんの方を英二さんとお名前を呼んで居りますの、英二さんに比べて、盛さんの方が如何してもお兄様だけに頼りして被在るので、入島も非常に頼りしく思つて居るやうでしたが、私は自分が斯うした感激派な女のせいですが、どちらかと云ふと藤村さんの「春」の中の人達を思はせるやうな英二さんの方を好きでした。

一体入島は理學士の辭にして、それとは全く方角違ひの文學好きで、交友も理學士仲間で見親しくするのは親友の眞木理學士がお一人、あとは皆な早稲田派の文學者はかりでした。

昔から文學者だの畫工だの、然うした藝術家は一体に禮儀のない、無遠慮なものと定つて居るやうですが、私共へ被入る御連中も矢張り然うでしたの、夜が更けやうが御飯時であらうが一切お構ひなしなんですよ、それがねえ、眞木さんとか英二さんとか、然うした仲の方なら兎も角、やれ入島が細君と家を持つた、どんな細君が見て来てやれ位の氣で被入る方が多いんですから、やりきれませんわねえ、おまけに無責任な女の話をなんかばかりして、厭やかで好いと云へば云ふやうなもの、餘り有難いお客様がやります。

西洋ではあなた、新婚當座二週間はおよろこびの訪問さへ氣をきかしてしない風習だと申すぢやありませんか、年中わやゝ騒いで居て、私情ついて入島と話しでる暇もありませんの、ほゝと云ふさいと思ひましてよ。

ですが英二さんと眞木さんと此二人は一日お出でがないと、何だか物足りなく、久しくお逢ひ申さないやうに思はれました。

「好いものあげませう。」

突然入つて来て、ボツケントの中から原稿紙にくるんだものを私に渡して置いて直ぐ又さよならと出掛ける英二さん、あとで見ると、定つて、澤庵だの、奈良漬だの、お家で母様がおつけになつたのをもつて来て下さるのでした。

英二さんが可愛い弟なら、眞木さんはこまめな姉さんだと、私は一人で然う思ひ致しました。



女子大學

英文科出身

# 新夫人の

## 打明話(十二)

### ▲第一回の支拂日

そんなこんなで暮すうち、いつの間にかお正月もいつて了つて、一月は静なく経つて了ひました。

其一月の終りが第一回の支拂日です。

先づ九圓の家賃米鼠肉屋酒屋八百屋それから牛乳屋新聞代も入れて、月末の支拂は三十圓で充分でした、わけても米屋の少ない事、二等米でもつて二圓なんです尤もこれはお正月の事で、お餅があつたせいでせう。まア普通三圓も見て置けば満山です。

純粋な生活費と云ふものゝ案外少しですむのには、私も八島も驚ろいて、下宿に拂ふのは馬鹿々々しいものだと思つたので、三十圓の月末拂ひの外に、四十圓の平高費には二人共呆れない譯には行きませんでしう。

つまり七十圓の支出。

何故そんなにかゝるのか、私共は今更のやうに首を傾げるので。

八島も私も可成り豊かな家に育つて、それゝ養生生活を送るにしましても、學費も充分にしむられ、まあ別にこれと云ふ不自由も知らずに暮してゐましたものですから、現今は最う今更の結婚以

来、双方の親達からすつくり關係をたされたやうな形で、全く獨立してゆかなければならん立場に居ながら、自分では真事像約にして居るつもりでも、つい昔の癖が出てせいたくするんですのね。

而してそればかりではありません、學校時代には氣がさして料理店なんぞには、ついぞ入つた事ありませんでした、よく二人で方々散歩いては、それお美食だ晚餐だ、又しても二圓三圓と然うした支拂ひをするんです。

「馬鹿らしいわ貴郎、それよか牛肉でも買つて歸つて家で頂きませうね。」

「ウン、餅しまあ好いさ、此處まで来たんだ、小島でも食つて行かう。」

毎校可憐しきに目白邊を散歩しては、いつでも定つて斯うなんです。

何しろ斯うかゝつては不可けない、それに職業も見つけれなければ、何時まで斯うして居られるものぢやない、私は急にい

らゝして、毎日のやうに入島をせびるのでしたが、八島は相續ち朝寝をして折々口を探しに出掛ける事もないではあ

りませんが、大抵は火鉢を抱いて讀書するでもなく、まあ煙草を吸ふのが仕事な

んです、それにお友達が被入れれば馬鹿話をして毎晩のやうに十二時一時頃まで

も夜を更かす。私つくづく嫌になつてしまひましてね。

「まるで若隠居ね、ちつとはき／＼なさ

いな、あなたに努力つて堪ちつてもしな

いんだから嫁。」

斯うした事も口に出して、私は一人でや

るも心配してますのに、何ぞと云へば

「君のやうに空想家や眼目だよ。」

と復して、眞木さんなんか心配してき

いて来て下すつた仕事は嫌だ云つて、一も二もなく歸つて了ふし、然う／＼何から何まで理想通りの職業があらう筈もなく、不安な生活を續けるうちにけつて暗い心持ちになつて、二人は互に氣まづく、何でもない事に煩惱を立てゝ、ちよ／＼喧嘩するやうになりました。





女子大學

英文科出身

新夫人の

打明話(三)

▲自我を没する苦痛

何故さう喧嘩をするのか、

彼様して久しい間の戀仲で、やつこの事

で結婚して置きながら、一緒にいるが早

いか、暗黙黙しそれ位ならまだしも、

最後には勝手にしろ。出て行きます。な

ど、言葉の行きがよきとは云へ、そんな

亂暴な事迄云ひ合ふんですものね。考へ

る自分ながら耻かしくなりますわ。

而も原因を考へて見ると、概々くだらな

い事ばかりなので、人様にお話しする事

も出来ないやうな、全く馬鹿々々しくつ

て、もう／＼喧嘩なんぞしますまい、そ

の度びに嫌な思ひをして、感情も害へば

頭も悪くなる。と斯う自分でも思ひ入

も然う申すのですが、又一寸した事から

云ひ垂つて、幾度も幾度もくだらない真

似を繰り返し／＼するんですのよ。

それもね、打割つてお話しすると、私の

方が悪いのかも知れませんが、いゝえ、世間からは、わけても老人達からは私一人が非難されるに定つてますわ。

何故つて、私感情なんですもの、不義理

なんですもの。入島が何と云はうとも、

それが不義理で此方に正當の理のある限

りは、決して盲従しない。これが私のい

つても定つてゐる態度なんです。

女らしくない。

或は左様かも知れませんが、併しです、何

時迄男の奴隷にされて、黙つて忍んで居

なければならぬと云ふ、そんな不義理が

何所にもありません。すくなくとも今日明

治四十何年の女は、弱く男の侮辱を蒙

るものではありませんまい。

妻は妻、決して奴隷ぢやないんですもの

ね。良人の前に凡てを捧げる、そりやあ

然う、私だつて入島のために何も彼も

一切のものを犠牲にしたつて憎しくない

と、まあ、斯うした事を思つて、慙もし

結婚もしたんです、ほゝと

ですけれ共、自我を没する事は苦痛よ、

普通一偏の事ぢや出来ませんわ。

又殊更らなくなつて好い譯だと思ひま

す。苦の自覺も何もない女なら兎に角、

私共には如何したつて出来ないのが自

然で本當なんですもの。

それをやつぱり、奴隷視して、自分ば

り絶對の權威を振つて、恣に態度をさら

うとするのは、男が悪いので、野蠻な解

らややな爲めです、否、これも矢張り男

の我儘から起つてゐんです。

その男の我儘をつのがまゝにつのらし

た日には、どうなるもんですか。女だつ

て等しく人間ぢやありませんか。ねえ。

私、學校時代に、中古の夫が妻を酷使し

て居る繪を見た事がありましたが、自分

一人なまけて居て、妻君にばかり無理な

仕事をさせ、それで少しでも氣に入らな

い時には、鞭をあげて撃つと云ふ有様。

私は入島の不義理を思ふ時には乾度、

昔見た此繪を思ひ出し、云ひやうもなく

眼が立つのでした。



女子大學

英文科出身

## 新夫人の

### 打明話(十)



## ▲生活の上の壓迫

自我が如何の、自覺が如何の、理想がましい事を云つては見ますもの、今少し突込んで考へて見ると、私共は矢張り生活の上の壓迫を受けてたのかも知れません。

生活の上の壓迫！

口惜しいけれども、仕方がない。私は斯う白狀した方が本當のやうに思はれますのよ。

其證據には八島が職業を求めて、蔑ろか見ました家へ移して行つたとき、私共は喧嘩も餘りなくなりましたものね。だが考へると自分ながら残念です、情けなくなります。

二人一緒に暮されさへすれば、それで済

山！どんな苦勞したつて構はない、どんな貧乏も敢てする。斯うした立派な覺悟を持つて結婚したもの、すぐもうこれなんですよ。

と云つて私共は別に苦勞と云ふ苦勞、貧乏と云ふ貧乏をした譯ぢやありません。以前が以前不自由と云ふ事を少しも知らないで我儘勝手な育つた私、買ひたいものも買はれず、汚い家に住つて、水仕のわざから何から自分の手一つでする、それはまあ苦勞には苦勞ですが、それよりも嫌で心苦しいのは、八島が何一つするでもなく、左様かと云つて貯へる金があるでもないに、寝たり起きたりゴロン、なまけてる心が知れなくつて、そんなにして居て行末は如何なる事か、努力々々！それなのに八島は如何？それにしてもなまけ者のために自分一人が一生犠牲になつて、朝から晩まで憂慮にはつかひくすぶり、自分の勉勵どころか、新刊の雜誌一つ讀む事も出来ない、學校生活は何の爲めにした？、まあそんなこんな不安やら不平やらがこんぐらかつて、つい焦々して來て、一寸とした機會に喧嘩になるんですわ。

精神的どうの、物質的どうのと、物質を輕く見て何でもない事のやうに考へもし云ひますが、さて實際は矢張り駄目、どうしたつて、否どうしたつて處が實生活の上には大變な關係をもつて居て、何が何でもその影響をうけなければならぬのですわ。

まア試しに三日も四日も一文なしで居て御覽なさいまし。下宿時代とは違つて、やれ入替の何となく、天王様だ、衛生だ、と、費金を金ですけ共、それはよくどりに盛りますの。心細くつてねえ。満山の金なら兎に角、一銀二銀、五錢に足りない僅かな金だけに、主人が留守だから無いとも云へませんね。それでも私、八島様や天王様の時にはね、いつても泣いて、

「私共はヤンで御在いますから。」づてねうそついて歸してやりますのほよよ



女子大學

英文科出身

新夫人の

打明話(五)

▲何の爲に結婚したか

入籍欄や天王様こそ、私共はヤンで御座います、お宗旨違ひで御座いますので、体よく退避する事も出来ませんが、どうでも退引ならんのは區役所からの衛生費です。それも澤山ではない、ほんの僅か三錢五厘、四錢云ふ金なんですものね。

僅かな金だけに、まさか持ち合せがないつて脚にも登りませんでせう、私因つてしまつて眞板になつて、

「皆さんお留守で、私は他から歸つてる者ですから、どうぞ又被入つて下さい。」もやつとの事誤聞化しましたが、それが一度や二度ではないんですから、屹度先方ちや變に思つたでせうよ。

まあ、散々極りの悪い思ひをしまわしたわ。貧乏なんて何でもない。些少だつて苦勞にする事ぢやないと思へてました。中々どうして實際に當つて見ると、空想

と違つて、随分苦しいもんですのね。八島もね、最後には其日其日の事に追はれるもんですから、嫌々某官省に勤める事になりました。

それと云つても薄給、ほんの腰纏なんですけれど、それでも定つて月々入るやうになる。幾らか心丈夫ですわね。

最初の程は嫌だ嫌だと云ひながら、毎日出勤しては夕方歸つて参りました。が、何時の間にか又なまけ／＼するやうになりました。

お友達は相繼ぐや文學者達が絶えず遊びに被入る、其上官省の方々も三四人被入るやうになりました。文學者達の時には八島も面白さうにお話して、時には盛んに議論なんぞする事もありました。が、官省の方となると些少ともお話しをせず、

ほんのおつきあひに傍に居つてますと云つた様子なんです。傍で見て居て氣の毒でしてねえ、勢私がお後と話題を發見してお相手にならなければならんです。

すると又、其人達がお歸りになつてから「馬鹿な奴達だ、大嫌ひだ。」なんて、八島は無禮に罵倒するんです。

そんな我國な事云つたつて仕方がない、あれでは人の感情を害すぢやありませんか、

「あゝと官省なんかよしちやい度い、くだらな、家庭のためにはたんなる嫌な事も忍ばなきやならんのか。」

と口辯なんです。

そんな嫌な人ならよしちやいささい、私なんかどうなつてもよう御座んすからつてね、云つてやり度くなりましてね。

余く、そんなに近家庭のために働くのが嫌なら何故家を持つたのか、結婚したのか、私腹が立つて／＼堪りませんの。

最初一分は愚か一厘の隙もないと思つた私共二人の仲には、いつの間にか大體な隔りが出来て、互に了解し合ふ事が出来なくなつて居るのでした。







女子大學

英文科出身

新夫人の

打明話(七)

▲聲の婆と筆談

八島の方でそんなに冷淡で、思ひやりがなくなつてゐるんですもの。

私だつて腹が立ちますわねえ。

家のためだ、経済のためだと、自分一人きりもき氣をもむがものはない。いつそ

下女でも置いてしまひませう。斯う思ひ

ましてね、内々自分で決心しましたが、

扱て桂庵から頼むのは何だか不氣味だし

知り合の人と云つても別になし、困りま

したわ。

所が大家の小母さんの世話で、大家でも

時々留守居なんか頼む、正直さんがある

から、それを頼んだら如何、少し耳が

が不自由だけれ共、至つて氣質の好いも

のだからと云ふのでした。

で、八島とも相談して、兎に角其のお選

さんをお願いすることにしましたの、するとお

お婆さんは六十八だと云ふんです、耳が

遠いが筆談で、かなでさへ書いて呉れよ

約束しました。

それですつくり筆談なんですよ。

氣をつけてかたばかりで書くようにと思

ひましてね、つい又本字が出て困りま

したつけ。

でも初めのうちは面白半分やつてしま

のよ。だけ共段々面倒臭くなる、それに

お婆さん圓み圓つたりなんぞして飛ん

もない、私の命じた事の反對をしたり

する事もあるんでせう、嫌になつちやい

ましたわ。

性來の推察が、病氣と兩方で尙更烈し

なつてゐる私ですから堪りませんや、お婆

さん聞談々して尙と用事を間違ふん

です。でも正直で親切なのをとりまに、不

自由も笑つて忍んで居たのですが、私は

段々氣重くなつて、筆談なんかうるさく

つて、聞えもしない者を對手に大きな聲

を出して、間違つたと云つては一人で氣

をもむと云つた有様なんですもの。

實際自分でも何故あれしきの事に彼様も

熱々して氣をもんだか、今思つても不

思議ですがね、つまりつわりでもつて、

病體に神経過敏になつてゐるのを見え

まのねえ。

自分も苦しみ、傍に居る人も嫌な思ひを

しなければならんのは此のつわり時代

ですつてね。併し私のはたいして重い方

ではなかつたのですよ。

餘り私に氣をもむんですから、あれで

は却つて病氣のためによくはない、それに

夜歸つて行く下女よりか、全くの下女を

雇つた方が何故につけて便利だと、眞木

さんの忠告で、間もなく其正直さんに

は眼を出しました。

そして其代りを、すぐそばの桂庵に頼

んで、若い者よりか老人の方が好いから、

出来るなら中途さんの田舎を出て然う云

つて置きました。

てね。

「馬鹿々々しい、今に赤ん坊が産れよう  
と云ふ所へ、他人の赤ん坊を連れて来ら  
れた日には、狭い家でも何も出来な  
くない、どんな儲け者かしらないけれど  
私の家なんか夫婦二人きりで、たいし  
た用事もないんだから、特別儲け者でな  
いことも好い、只親切で正直者でさへあ  
れば好い、尤も勝手元は奇麗にして貰は  
なければいけないけれど。」

と斯う申しますと、

「へえへえ儲け者でなくつても、へえ」  
と嫁にそれを繰り返して「ナニね、儲け  
者でなくつておよろしいのなら、其内な  
い事も御在いますまいから。」と云つて其  
日は歸つて行きました。

私は何だか桂庵の婆さんと云ふのが虫  
が好かなくて、かますのやうな矢つたあ  
むを妙に突出して、切り口上でものを云  
ふ所を見ると嫌で嫌で、人が悪さうだか  
らいつそ關係を断つちまはうかと思  
ふのでしたが、其翌日また参りまして、今  
度はお望み通りの正直婆さんを連れて来  
たから試しに使つて見て呉れと申すので  
せう、まさか最うお前の所からは頼みた  
くないとも云へないぢやありませんか。  
それではと云ふので、正直婆さんを見る事  
になり違つて話して、ますと、上臈の者  
で、つい此頃出京した計りだと云つて、  
如何にも田舎者らしい丁寧そうな五十位  
の婆やなのです。

すく臺所へ行つて奇麗に板の間にふきあ  
げて、汚れた食器などをそれ／＼片付け  
「一寸桂庵へ行つて参りますから。」  
と出て行きました。

「如何したんだらう、さてもつとまらな  
いのか。」等申し合つて居りますと、桂  
庵が来て、婆やは助め度いと申しませう  
お使ひになりますか、お給金は一回五十  
錢頂けばよろしい。三圓位が今日の相場  
ですけれど、年寄りの事で、お宅は小人  
敷だからと申すので、丁度合せて被在  
つた眞木さんとも相談の上、とり定める  
事にして、何かの誤解はすつくり眞木さ  
んにして頂きました。



女子大學

英文科出身

# 新夫人の

## 打明話(八)

### 赤ん坊つきの下女

桂庵へ申込んだ翌日、桂庵の婆さんがや  
つて参りまして、用合出の婆やと云つて  
も、どうも今の所一寸にはないから、若  
いのになすつては如何、それならばもう  
今の今でもある、正直で奇麗好きでまこ  
とに働けるで申分ない女です、併し少な  
きすなは赤ん坊が一人附くもんですか  
ら、だけれ共其位の事はお忍びになつて  
も好い位立派な下女だと申すんですの。  
入島は馬鹿な、赤ん坊附の下女なんか置  
いて如何なるものか、一体眞面目でそん  
な事云つて来たのか如何か、断つちまへ  
さ云つてね、酷く不機嫌ですの。私だつ  
て何だか馬鹿にされたやうな氣がしまし



見た鏡も、お腰も曲つてないので、まあこれなら大丈夫と、私は内々安心するのでした。

晩餐後、皆で茶の間の火鉢によつて無言話して居ますと、臺座で寒さうに鼻をすする聲が聞えるんです。

「オヤ婆や、御飯が済んだら此方へ出て来ると好い、そんな處に居ちや寒いでせう。」と斯う聲をかけますと、

「え有り難う、ナニ寒がありません、こんな火が盛つてますから。」

「だけ共晴いね、ねえ此方へ出て来ると好い。」

「えと私今着物の裾をあぶつてますからね、どうも井戸が遠くて馬鹿に着物を濡らしちやつた。」

「オヤオヤお婆さん、こんで着物なんか乾しちや汚くつて、不可ない、火鉢があるぢやないか火鉢が。」

湯桶家の真木さんが顔をしかめて仰有る「不可せんかい、ナニ最う乾きましたから」と茶の間へ入つて来て、

「汚い、仰有るけれど、赤ん坊のおしめだつて替わりますあね、何もおしつこの臭氣がこんろに侵み付く譯ぢやなし、貴郎も随分母性でらつしやるよ。」

云ひながら突然左の脚を前に投げ出して「御免なさいよ、私脚が悪いもんですから、それに斯う寒いと尚更感じて来るんですよ、本當に困つちやう。」

オヤオヤと思ひもしてねえ。幾ら何でも失禮だと云つた風な事を、それとなく道端しになじりましたの。處がね、婆やの方では脚が悪くて満足に座はれないからと、その事を第一番に斷つて置いた筈だが、桂庵から其話をしない云ふのは不都合だ。だけ共考へても御覽なさい、脚

でも悪くない日には、一圓五十錢やそこいらのお給金で脚が朝から晩まで水仕事奉公するもんですかつてね。

それに話してゐうちに田舎者らしくもない處があつて、それとなく話させると、二三年前から東京に出て来て、随分方々

歩いたらしいんです。嫌になつて了つて早速眼を出し度いと思ひましたが、又私が病氣して寝ついたも

んですから、それなり使ふ事になりましてがね、朝から晩迄口小言の絶間なし、入湯が用事を命じまして、黙つてした

事はありません、其位ですから私の云ふ事なんか聞く事ぢやありませんわ、恰でもう、入釜しい姑さんをつくり。

「私一寸と大久保の前居た家へ荷物をとりに行つて来ますから。」

着物迄着かへて、前以て私共の許可を得たでもないに、私の返事を聞かず、づん

と出て行くんです、おまけに私は病氣で寝てゐるんですよ。

口惜しくつてね、入湯が歸つて来ると直ぐ云かけて小言を云つて呉れるやうに頼み、入湯も怒つて散々云つてやうと待ち

も拂へて居りました。處が其晩は終に歸らな十二時頃ふり、怒りながら私は表戸をしめちやみました

女子大學生

英文科出身

新夫人の

打明話(十)



我儘過て奇抜な下女

夕方婆やが歸つて参りました。大して大きくもないが荷物でせう、可成り大きな浅黄木綿の風呂敷包を背負つて



併し云はうと考へて居た小言もわざとよ  
して知らん顔で居てやりましたの。

丁度其日は最う四月だと云ふのに馬鹿に  
寒い日でした。婆やには氣の毒だけれ共  
入島が官省から寒くて歸つて来るんだか  
ら、何か暖いものを造へて待ちませうと  
思ひ、あんこうを買つて来るやうに命じ  
たと思ひなさいまし。するとねえ、婆  
所て散々よつくさ云つてました。が、いつ  
もの事ですから私も別に何とも云はず、  
其内に出て行つたやうでしたが、裏で待  
つても待つても根つから歸つて参りませ  
ん、最う入島も歸つて来る時刻だのねと  
散々氣をもんでますと、やがて婆やが歸  
つて来ました。

「陰分運かつたねえ。」

突然斯う云つた私も私ですけれ共、私の  
此言葉の意味はあなたが運いのを咎めた  
譯ではなく、其内には随分探し歩いたの  
だらうとの同情の心もあつたのですわ。

だのに、婆やの答へは如何でせう

「やれ／＼半死する程苦しい思ひをして  
いや、運いたんで又叱られるし、あゝあ  
何の因果で事公なんぞしたんだらう、  
人をつけ、犬だと思つてやがらあ。」

餘りだと思つて、如何な事でも忍び切れ  
ず、たかゞ下女風情を相手にして馬鹿ら  
しいとは思ひましたが、疍性の私の事  
で黙つては居られず、つい云ひ争つては  
ては最うお前のやうな者には何も用事は  
たのまぬ、自分でするからよろしい！と  
怒鳴つちやいました。

「はい／＼それぢやお暇を頂きます、大  
きにお入笠しう。」

憎らしい口を利用して風呂敷包を持ち出し  
ました。

入島は其木さんと御一緒に歸つて参りま  
したか、私の話を聞いてこれ程苦い顔を  
して居ました。

所へ婆屋の婆さんが来て婆やに態度があ  
つた者が許してやつて今一度使つて呉  
れと云ふのです。

それを其木さんが嫌だときつぱり断つて  
給金は一月分すつくり揃ふからと仰有  
ると、どうも濟みません、有り難うと澄  
して云つて表へ出ましたが、裏には婆や  
が待つて居たらし、一緒に二三間行つ  
たと思ふと、キヤツキヤツ笑つてゐるん  
です、腹も立つて、つく／＼下女と云ふも  
の、婆屋と云ふものゝ度し難いのに呆れ  
歸つて了つました。

婆屋が来て殊更に詫びたのも、つまりは  
給金を得ようがため、先方から出て行つ  
たと云つては損しなければならんからな  
のですのよ。

婆やが大久保の前居た家と云ふのは矢張  
り、黙つて出て私共へ目見えに來たんで  
すつて。だから私共から大久保へ行くと  
云つて出て行つたのも、成はまた他へ目  
見えに行つて、取り定めて来て、私にわ  
ざとに喧嘩を吹掛け、出て行かすやうに  
したのかもしれません。兎に角大變な返  
やでした。



女子大學

英文科出身

新夫人の

打明話(三)

▲悪むべき慶庵の手段

婆やが歸つて來たのは其翌日も彼はお賽  
過官かんです。嫌に澄して雪が降り出  
したから今日は泊つて來ようかと思つた  
がそれで不自由だらうと思つて、歸つ  
て來た時、無暗に恩に被せた云ひ方する  
ぢやありませんか、口惜しくつてねえ。





女子大學  
英文科出身  
新夫人の  
打明話

△嬉しかつた長火鉢

入局の準備を急いで、何を自分一人あそびする事はないぞ下女を呼つた私も、急に構まされて、けつて自分で立置いた方が好いと思ひ、壁やに眼を出すと同時に、又元々通り夫婦二人だけの家庭になりました。

自分のするのと受けるのするのと、夫だつて大變な異ひで、新妻が云つても出来なから家事一切は主婦が自ら手を下してやるに限ると、つくづく悟りまして、するうちに入局も官舎で氣うけがよく、急に變遷して重役に使ひられる事になりました。

私は一人で斯う心に叫びましたわ。と云ふのも、入局のお友達も退く家をお持ちになり、奥さん方も又嫁いだしましして結婚しますにつり、見ないやうな服で道具だの家庭の様子だのを細かに観察しては、いやに皮肉つたお世辭を云はれるのが辛いからです。



（下）

近頃を遊びあるき泊り歩きして、又も新婚時のやうに浮いた生活をいたしましな。若い心には目先の愉快の外、一寸先の事も見えないのですわね。入局も何一つするにも愉快相に、嫌だ嫌だ云つて、兎角職勤でも居た官舎へも、反對に面白相に出掛けて、よく今日は斯様な計畫をしたとか、新機云上事を申出た處、上役が面白がつて直ぐに實行して呉れたとか、聞いて居ても心地の好い事はかり難して聞かせて、某の面はいつても愉快でした。

だつてさう云ふけれど、入局者の家を見ろ、無いよ、好いぢやないかつてね。でも貴女の家ぢや、お二階もあるしお廣くつてよござんすわね。と斯うした事を面を對つて云つた奥さんもありますのよ。

が然うして少しでも餘裕のある生活に入つて見ますと、今迄は何だも思はなかつたのですけれども、抑て足りないだらけの道具で、あれも欲しい、これも欲しい氣になつて、間に合ひさへすれば好い主張で買つて下すつた奥木さんの見立ての道具では満足出来ません。それにお恥かしいお話ですけど、まだ長火鉢もないやうな始末で、ほゞ金く家の中は空っぽなんですよ。

入局をせびつて、まだ急ぐ事はないぢやないか、退かなくなつて必要でもないかしら、私にでもなつて買つたら好いと申しますのを、それではどうしても不自由だ云つて、二人で数々道具屋を見歩いて、お茶屋さんとそれだけ十五圓のを購入しましたが、其時の趣向しき。

「御連中の内では些少も成かしかない」





女子大學生

英文科出身

新夫人の

打明話(三)

吉原から歸つたんだ

長火鉢の前に夫婦茶向ひに座つて、乙だ

とか、好いわねえとか云ひ合つて喜んだのも暫く、馴れれば何でもない事になつて了ひました。

何時の程にか八島の歸りは遅くなり、不定になりまするやうになりましたね、尤も是は官省で重く用ゐられ、自分で仕事が出来なく、仕甲斐があるやうになつてからは、兎角事務がいそがしくつて、自然然うなつたのもありますね、併し友達の家を廻つたからの、久し振りに舊友と出會つて松本橋でビールを引かけて来たのさ、ほまゝまあ色々な口實で以て、酔つ拂つて来る事が多くなりましたの、そんな時長火鉢の前にしよんぼり座つて何時歸るのだか譯も解らぬ者を待つて居るわびしさ、そりやあ人の細君になつて見なければりや解りませんがね、全く嫌になつちやひますわ。

それがまだ十一時十二時頃までなら何でもありませんけれど、一時も過ぎ二時にもなり、時には三時四時、鶏が歌ふ頃になつて御覽なさい、夏の事なら電車の音が聞えなくなつたと思ふと、暫くするともう、牛乳屋も車を曳いて通れば街道は賑やかに人通りが絶えないうと云た有様、夜中待ちあぐんで、上氣して重い顔の氣分が悪いのに、それでも頑張って来るのか、晝には如何、夜は是非と、また終日待ち暮し、散々氣をもんで氣をもんで居る所へ、如何でせうまあ、官省の用事で名古屋へ出張したからと、やつこの事で堪へなうです。

電話こそないけれど、電報もあれば、せめて新橋を發つ時にでも端書をよくして呉れたら如何、さうすればこんなにも氣をもまなくとも済んだものを。腹が立つて泣き度くなりましたわ。これをまあ新婚當時に比べて御覽なさいまし。何時でしたか官省で急用が出来たとかで、一晩遅くなつた事が御座いましたかね。其時はあなた、コシヤオソクナル、ハヤクテロとまあ、御丁寧に電報をよこしたんですよ。それなのに……私が腹を立てるのも無理ないでせう。

それからまたこんな事もありましたわ、同期の卒業生連中の會があるとかで、其晩は遅くなると思つて居ましたがね、まだ例の三時になつても歸つて来ないおやありませんか、歸つて来たらお茶漬あげませうと思つて、あつさうとしたものを造へて待つてたのに、口惜しくつて、併し早く歸つて呉れよば好い、もう歸りさうなものだぞ、全身の神経が頭に肯な集めて了つて、ヤトと小さな物音まで聞こえるんです。すると幽かに車輪の音がし、車夫と話しながら家の方へ来るのは八島さんです。

私が種々持つて出迎へますとね。『ヤ御苦労々々』と大きな聲で車夫をねぎらつて『吉原から歸つたんだ。有り難いと思へ、歸つたのは乃公一人だぞ』つてまあ、近所隣りの思はくもありましたわ、大きな聲で私全く腹が立ちましたわ。



勝手に遊び歩くさへ、已に已に怪しからん事ですのに、如何でせう。汚らわしい吉原なんぞへ行つて来て、そのおまけに「歸つて来てやつた、有り難いと思へ、コラ禮を云ないかてつてんですものね、僕ら何でもカッとして了ふやあまきんか。」

「何ですつて、有難いと思へですつて、へん、何云つてらつしやるんだらう、馬鹿々々しい。」  
散々いひやいしやしてゐる所だから堪りません、斯う云ふと一様に私八島の頭をい

やきなさんなよ、それでも歸つて来たのは乃公一人だ、眞木君も泊つたせ、オイ眞木君も、彼の遠慮なる眞木理學士さへだ、所で乃公は歸つて来た、細君を思つて歸つて来た君を思つてねえだ、君を思つてねえだ。ハッハッハ、偉いだらう、だから感謝しろてんだ、解つたか」など、酔つぱらつた中から機嫌をさるやうな事を云つてゐる、それを聞くと尙更ら腹が立つて、

「何が偉いんでせう、吉原から歸つて来たのがそんなに自慢する程偉い事なんですか、誇る可き事なんですか、考へても御覧なさい、良人たる者が細君の前に吉原へ行つたなんて事を第一正當に云ひ得られるものか如何か、眞木は女子一人に限られ、男子はどんな馬鹿な真似したつて好いもんでせうか、あなたは何時代に私に何と仰有いました、それともあれは私を偽つて居たんだと仰有るんですか、承りませう。」

おり／＼しながら八島の胸へ詰めよつたもんです。すると  
「まあそんなに怒り玉ふなよ、餘り怒るとお多福になる、ソラソラ！」  
幾分手つきをして私の頬を支へて眞似をする、其手を振り擲つて、  
「うるさい！馬鹿にしてらつしやる。汚らわしいそんな手で指一本だつて觸つて貰ひますまい。情けな何と云ふ人だらう！」

「まあそんなに云ひ玉ふなよ」とこれを歌のやうな節で繰り返して返し、八島は何時の間にか勞れて眠つて了ひました。が、私は中々どうして眠る所ですか、口惜しい事が無暗やたらに胸へとみあけて来て、いつそもうこんな男を離別して了はうか。吉原なんぞへ足踏するとは何と云ふ無節操、よしんば泊らないで歸つたにしたら所で、最初切に拒んで海中から抜けられなかつて譯なからうに、要するに行き度いから行つたんだ。馬鹿々々しい。斯う思ふと八島の寝顔が實に面憎くつて、まさか吐き掛けはしませんでしたけれど、カッとなつてきしてやりたいと思ひました。



女子大學

英文科出身

### 新夫人の

### 打明話(三)

▲カアアジ、レクナユアー

僕ら夏の夜が明け易いと云つても、朝が鳴いて、氣の利いた人達はもうそろ／＼起きて出て涼しい内に仕事にかゝらうと云ふ此の晩方までも、散々つばら人に氣をもませて、殊には普通でもない体の女一人を家に置いて、自分一人が好き放題



女子大學生

英文科出身

# 新夫人の

## 打明話(四)

### 浅間しい男子の本能

やつこの事で目を覺したかと思ふと、それは最う彼はお盡過ぎの、おまけに破れるほど頭が痛む、ヤレ氷嚢で冷して呉れ、むかつき相だから早く金匱をよこせの、それはく大した騒ぎで、うんうん呻り通すと云つた有様ですのそれ見た事か、好い間だ！

むしやくしや腹で斯うは思ひますもの、目の前で苦しんでる者を打捨つとく譯にも行かず、自業自得だとは云へば定めし苦しい事だらうと思ふ可哀相にもなつて一生懸命介抱したりなんぞ、又終日大心配。どちらにしたらつて女程、わけても細君程の悪い者はありませんのねえ。併し其の宿醉の苦しさも、のど元過ぐれば熱さを忘れるの該通り、直ぐ忘れて了つて、翌日からはもう又何だ彼だ云つては飲み歩く工夫ばかりして、定つて深酒して苦しみるんです。

ですから素顔で居るときには宿酒で苦し、それぞ迎へ酒とか云つて酔のさめきらない内には又飲み、年中酔惚つて酒の氣のない事はないのですものね。

それでも感心に官省の方へは餘り嫉妬も致さないで参りますが、家に居るときは氣持ちが如何しても酒の爲めにグタクけて居ますから、何をする氣もしないで見えて、讀書するでもなければ冥想するのでもなく、始終グーブグーブ云つて頭が重いの、胃が悪いだのゴロンと轉がつてばかり居るんでせう。私見て居ても思ひにくつてね。考へれば考へる次けつたらなくなりませうよ。

それに又眞木理學士もどうやら遊びをおぼえていらしたやうな御様子なんです。いふえ眞木さんばかりぢやない、一体に私共へいらつしやる御連中が皆んなさうなんですの。

以前からよく女の話をしたり戀愛を語つたりなすつた、文學者の安井さん兄弟、別しても兄様の方の慶雄さんは訊きへ見ると定つて女のお話をなすつて、彼の男が来るごとに話をして居ても、それが乾皮女の話に提へられるから、不思議だと皆ながら云はれた程、併しそれは同じ女の話だ云つても、甲武藏の電車には美人が多いの、何々君の妹が「一寸色白で可愛い顔してるから、思ひ切つて戀して見やうかなど、そんな他愛もない事でしたのに、如何でせう、まあ、此頃では、赤坂の何子がどうの、不見解がどうの、浅草だ、吉原だ色んな下等な女の氣なんです。弟の英二さんは英二さんで京都の祇園町でおぼえて来たとか仰有つて、併ふと得意で幾々喇叭面をお吸ひなさる以前は藤村が獨がの新作詩でしたのに變れば變るもんと思ひましてね。





女子大學

英文科出身

# 新夫人の

## 打明話(五)

### 内証でする無理算段

變るのも當然、社會へ出て行けば、どうしたつて書生時代のやうに單純な生活で居るわけのものぢやない、複雑になつてきまゝやつた時間通りに官省から返けて歸るわけには行かぬ、實際と云ふ事もあれば友達を訪問もしなければならぬし、舊友が尋ねて来る事もあり、女の考へるやうなもんぢやない、お前たちに男の心が解つて堪るもんか。

これはいつでも定つて入島の云ふ事で、私が少し不平がましい事を申しますと、生意氣な事云ひなさんを前戯きに、直ぐこれですのよ。

全く女には男の心は解りません、何故彼等酒を飲んで酔つて、くだりもしない悲憤慷慨をしたり、女をもてゐるんだら馬鹿げたまねをし歩くのか、面してそれが面白いのか、案のある人は要、要のある人は要、然うした者に心を寄せ氣を寄せ、あげくの果ては自分も苦しい思ひをしたければならぬのぢやありませんか。女の私なんかにはどうしたつて解りません、解りません、解らないどころか馬鹿々々しくつて腹が立ちますわ。

ですから私

「男の氣持も、えええ、もしそれがあつて男の子の心とすれば、女には、わけても此私にはどうしたつて堪りません、而して又解りたくもありませんです。」

「そんな女だ、そんなら折にない不平なんか言はないで黙つてろ。」

「黙つてた日にはどうなります、私困り度くはありませんからね。」

「つべこべよく云ふ女だナ、偉いながら俺も男だ、君なんぞに迷惑はかけないからね、安心して玉へ。」

「それならよござんす、それだけ貴男が責任を持つてらつしやるんなら、私何も云やしません。」

「併し、俺も男だと感傷つた入島も、散々そんなくだらない真似し歩いたもんですから、限りのある金、殊にはさう澤山でもない俸給ですものね、月末の支拂ひに差支へるやうになりましたの。」

「それも前の言葉があるもんですからね、初めのうち、やりぐりの出来る限りは私に内証で色んな苦しい算段をして来ては知らん顔で居たんでせう、だから、」

「君、今月末はどうする事も出来ない、氣の毒だけれどもどうか押付けといて呉れ玉へ。」

「斯う云ひ難さうに、それでも面白くないと見えて泣く泣く入島が申しました時には、全くどうする事も出来ないのです。さればと云つて仕方もない、大家を始め米屋酒屋へどう云つて待たして好いのか解りません。」





女子大學

英文科出題

新夫人の

打明話(六)

▲慈々質屋の御厄介

三十圓の支拂ひ、さて如何云つて待たしたのか、今日は少し都合が悪いから、今暫く待つて呉れる云つて、ハイそれではと黙つて文句なしに引退るか如何か、

五日までとか十日までとか、然う云つて掛けは可い入島は申しませうけれ共、さればと云つて、其の五日十日に入金のあてがあるでもないのに、そんな一時のがれを云つて、其目になつて催促されたら如何、又都合が悪いからと云ふ譯にもゆくまいし、よし又思ひ切つて鐵面皮に然う云つたとして、それでは商人の方で承知しないのは解りきつたはなし。

如何したものか、出来る事なら此三十日にすつくりとやんと支拂つて了ひ度い。やつて了ひ度いけれ共、手元にあるのはやつと五圓、それきへ入島が、自分で洋服屋へ月賦に支拂はなければならん金なので、漸く工面して来たんだから、他の支拂ひの方へ廻されては困ると思ふんです、でなにと後の事があるからつてね。自分で洋服屋の支拂ひをこさめり難い譯から、私だつて同じぢやないか、餘り云へば自分勝手すぎる入島の態度を腹立しく、何と云つてやも度いとは思ひましたが、三十圓の支拂ひに對する五圓は、満足にやれるのは米屋位、ある位とやらなければならんので、どうせことわらなければならぬものなら、五圓位入島の思ひ通りにさせるが好いと思ひましてね、私何と申しませんでした。何も申しませんでしたけれ共不平でたまりません。

「私一人が借金の云ひわけして置けば好んだ。」  
併し如何思つても云ひわけするのはいまいでいやで堪りません。

入島は洋服屋へ拂はなければ後々の事があるからと申しました、洋服屋がさうなら米屋は如何、八百屋は如何、酒屋は如何、毎日の小使錢があるでもないに、米屋が持つて来て呉れなければ八百屋が御用事に來なければ如何する事も出来ないうやありませんか、よしんば誰々々がら廻つて來たところ、毎日前見合して繰た事いやなこと！  
「貴郎、私ことわれないわ、如何しませうねえ。」

「そんならいつその事ゆうづうして來ようか。」

「ゆうづうするつて如何？ ちつて出來ないやありませんか。」

「出來るさ、思ひ切つて質屋へ行くんだ質屋へ。」

「今いらぬものを家に置いてたつて仕方ない、一時ゆうづうした方が好い、いる時には又さうにかなるんだからね。」

## 新夫人の

## 打明話(廿)



## ▲辭職した當座

さう云へば成程さう、指環だとか時計だとか、おさんごんして居る今の私に必要なものでもないのに、それで一時のゆうづうが出来るものなら、損は損だけれ共、背に腹はかへられぬ今の場合、さうにかした方が好いと思ひましてね、速に質屋へ關係する事に致しました。

純金四匁の石入りの時計と、それでやつと二十圓、それでも入島は比較的よく貸したんだよと申て居りました。

其外衣類も入れまして、やつと其月末の支拂ひをすまし、自分の小遣錢を作りました。

ですけれ共相變らち入島は御酒に酔拂ひますし、酔拂ふといつても賭宅は一時二時、時には四方になる事も珍らしくありませんと云つた有様。

次ぎの月末には又同じく困つて、同じく質屋です。

如何したら斯うかと思ひながらもなりますのよ、ですから私入益しく云つて、どうか入島を眞面目に聞かせ度いと思ふのですけれ共、結婚前と違つて、私の云ふ事なんぞ耳にも入れませんのですもの。そこへ又悪い時には悪い事が重なるもの

でして、入島は官省を近く事になりました。

と云ふ譯は深い事はよく話しも致しませんから解りませんけれ共、入島の上役で入島を引立てて下さつた方と云ふのが、官省で意見通りする事が出来ないからとか傳有つて御辭職なさる事になり、從つて入島も運命を共にした譯なんださうですの。

困つたもんだとは思ひましたが、それも仕方のない事で、そのうちには如何にか職業のめつからがい事もなからうと思ひまして、それについては私何も申しません。それに今迄通り官省につとめたとして、月給は少しだつて變して家へ持つて歸るのぢやありませんもの、經濟上違ふのは洋服屋へ五圓の月賦金位。

けつく官省なんかよした方が可いからしれない、さうすれば少しは眞面目に何彼を考へるやうになるかも知れない、私は斯う思ふのでしたが、矢張り駄目！

職業をめつたに運動するんだと申してはなけなしの小便をさらつて外出しては、乾度歸りには酔拂つて、私の手前それでも氣がさすも見えて、ヤレ何々君の所へ行つた所、久しぶりだと云ふので交酒を

御馳走になつたの何のぞ、知れ切つたうその云ひ譯ばかり、ナニ矢張り安井さんだ眞木さんだ御連中で寄り合つては日比谷の松本だの銀座のクローン茶だの、そんな所で一寸一杯引かけては、その後をひいて、つい加六ホールだ何だそんな事にきまつてゐんです。



女子大學

英文科出身

# 新夫人の

## 打明話(八廿)

### 俺ア牛になる

さう斯うするうちにも、私の特は客数なく進んで来て、帳場のやうな大きなお腹になつて、十月が臨月だと云ふのに八月の末、九月の初めにはもう今にもこぼれさうなお腹なんです。

それにどうにもあつくつて苦しくつて、不行儀なお話ですけど、年中養育んでばかり居たいんですよ、何一つするのもおつてうでおつてうで、それこそ實家に娘で居る時分なら、たてのものを機にもせず、傍からは傍からで病人としていたはれたものでせうに、御飯をたいて其あとお釜を洗ふ時の苦しさつたらあもません、突出たおなかと胸の所べつかえさうで、堪らなく苦しい、少し重いものをもつと直ぐ息切れがして、顔がカッカッほてつて、全くお憂所するのは無理かと考へましたわ。

ですから共然うかと云つて、御飯焚きの下女を傭ふ譯には今のところ、無濟がゆるしませんし、八島は男の事で、重いも

のは成可く持たないやうにさか、憂所もしまはないで好い、打這つとじ、寝轉んで居て氣持ちがよければ、家の事なんかまはす寝て居たら好いだらうと、斯う親切に申しては呉れますものよ、自分で少しだつて助けて廻一つ抱いて呉れるのがやありません、いつまでもいつまでも朝寝をして、堪り兼ねて早く起きて下さい、十時にもなつていつまで寝てゐるつもりなんですつてね、むしやくしやまぎれに私の言葉も烈しい調子なんですの、すると、寝たり起きたりそんな事にまで干渉して貰ひ度くない、俺ア牛になるんだと大きな聲で怒鳴ると云つた瞬間ですのよ。私腹も立つてどうにも八島の態度がわきたらない、せめて人並に起きて、自分の寢床位あげて片附けて呉れたら如何かたづけて呉れないまでも、こんなに氣をませないで、たまに、一朝位お早く起きて一緒に朝御飯を頂いて、讀書するとか何とか、少しは裏面目な態度を見せて呉れたつてよさそうなんだ、毎朝毎朝腐れる程朝寝をして、大急ぎで御飯をかき込むやうに濟し、運搬に人を訪問しなければならんとか何とか終日外出して夜遅く歸つて来たと思へば、きまつて酔拂つて、直ぐ寢床の中に入つて了つて、努力つて事は一つもありやしない。

これでまあ如何するつもりなんだらう、今にも飛び出しさうなお腹の私を一人、斯うして家に氣をもませて、自分一人が身勝手し歩いて、それで夫としての責任親としての責任が済むものか。  
「口ではつかも樂にしてゐるさか除き無理な労働しないやうにさか、親切さうな事云つたつてそれが何になる！」  
私は口惜しさの餘り、泣いて泣いて泣きまじした。





女子大學

英文科出身

新夫人の

打明話(九廿)

### ▲離別、子供は？

ですけれ共、餘り焦々したり氣をもんだり、そんな事して弊に墮つてはいけない殊に妊娠中甚く氣をもんだり腹を立てたりすると、お腹の子に墮つて馬鹿の兒が産れるとか聞いて居ますので、さうでもない馬鹿なんぞ産んだ日には困ると思つて、八島がどんな態度で居やうと一切知らん顔、無關係で居やうとつてめましかければ共、やつぱり志を態度を見ろとい焦々しちまつて、胸のところが元々ですけれ共、もう歸りの遅いのはなれて了つて何とも思はなくもありました、而して産れて来る赤ジ坊のために、苦しい中からも掛がなきんを買つて来たり、賣木綿を買つて来たり、雨裃だの服着だの小さなのをつくりつくり、八島は八島だ、私は私だ、どうでも勝手にするが好いと云つた氣になるのですした。

併し又、ふと自分でその氣持を味つて見て、云ひしらの淋しさを感ぜずには居られません。

私が八島を冷淡だとか薄情だとか云つて憤慨して居るうちに、いつのまにか矢張り戀の熱がさめて、斯うしたつめたい心になつて了つたんだ。

併し夫婦つてもものは皆な斯うしたものをのかしら、若しさうとすれば實にくだらない。

何のために死ぬ程煩悶して一緒になつたのか、親を怒らし、親にそむいて、自分から好んで苦しい思ひをしなければならなかつたのか、

馬鹿馬鹿しい。

そんな事なら何も、戀愛しなくたつてよかつたんだ、同じく世間並の夫婦と同じに斯うした氣持を味ひ合ふやうになるのなら、八島と結婚しなくたつて誰とでも對手は擇ぶ事はなかつた。

寧ろ田舎の地主か何かの、出来るなら、其の良人たるべき男と云ふのが馬鹿か何かで、家庭の事から何から一切の事あらゆる權利を自分の手に握つて、思ふまま我儘をし、仕度い放題をしつくしたら面白かつたらう。

こんなデカタンな亂暴な事も考へるのですした、随分でせう、併し本當だから仕方ありません。

いつその事八島と關係を断つて了つて、離別されやうか、

離別、離別。

産れた兒は如何？

そんなものは如何なつたつて好い、八島が欲しければ八島の方へ渡して了つて、一生無關係で居ても好い、一應斯うは思つて見ますものゝ、やつぱり小兒火けは自分の方に賣つて行き度いやうな氣がします。



女子大學

英文科出身

新夫人の

打明話(十)

▲良に戀つた様な運命

いっその事入島に云つて、本當に決行し  
やうか。斯うまでしてやつて結婚して置  
きながら、今更離別とか何とかそんな事  
を云ひ出したら、世間で笑ふだらう、  
笑つたつて構はない、何もそんな遠慮を  
して無理に一緒に成てゐるには當らない。  
だが今は時期が悪い、同じ別れるにして  
も、入島が職業をめつけてからの事にし  
やう、それに私がいつ産れるか解ら  
ないお腹をかゝえてゐるんだからと、まあ  
さうした口實を自分でつくつて、態度も  
離別を思ひ、又思ひ返さ、くだらない苦  
しい日を送つてますの。

入島は何よりも酒で、話さへ飲んでれば  
天下泰平です。

いつもの通り例の運動のためにと申して  
朝出掛けて参りましたね、何所をどうう  
ろつき歩いたものか、二時過ぎにドンド

ン表の戸を叩いて歸つて参りました。

出迎へると入つて来る入島と一緒にプー  
ンとそれはきついアルコールの香ですの

「まあ酷く酔拂つてー」

「痛い痛い怪我しちやつたの。」

見るも口元を紫にして細く一文字に血が  
にじんでゐるんです。黙つてますとね、云  
ひわけらしく舊友が二人電車の中に居て

突然出會つて、それから一緒に酒を飲ん  
で、つい酔拂つて歸んだと申すのでした。

私は好い加減に聞いて別に深く聞きた  
りもしませんでした。

其翌々日入島が何所かへ出掛けたとへ  
英二さんが被來つて

「入島君の妾は如何しました？」

つてお聞きなさるんでせう。

「オヤ如何して御存じ？」

私の方では何の氣もなかつたんですけ  
れ共、英二さんはハツとした様子で、

「ナニ知つてます、僕、アノ會つたから  
入島君どうして妾したつて其女に云ひま  
した？」

「酔拂つて。」

「だけ共何所で、どんな風にして怪我し  
たつて云ひました？」

其の英二さんの様子が如何にも怪しいの  
で、其時入島が歸つて来ると、英二さん

が被來つた事を話し、妾の事を聞きまし  
たの、すると入島は私が英二さんから聞

いて知つてゐると思つたのでせう、舊友と  
一緒にだ云つたのはうそ、英二さんと二

人で鶴巻町の某居酒屋で飲んで、酔拂  
つて隅干に腰掛けて月を見てゐるうち、つ

い落こちなんだと申しますの。

居酒屋に隅干があるものか如何か、無論  
私は存じません、併し何故に最初それ

から私にうそを云はなければならなかつ  
たのか、

「あゝお夫婦もこうなつちや駄目だー」  
私心から歎息しまひました。(大尾)



女性の素質を思ふ

人の處女が妻となり母となる。世の中にこれほど明らかな事實はない。然るに餘り明らかな事實と云ふものは、現もするも極端な事よりも輕く取扱はれ、又一つには人が本能的に、その事實の前に眼を覆いで了ふが故に、却つてその真相を探ぬるに難い。併し人生の學問は是等の困難を蒙つて、初めて裏らし得べき真理の智識である。そして、此の智識を有すれば有するほど、人間は眞の人生に近づいて行くことが出来る。日本現代の小説家は、此意味に於て殊かに優れた人生の善智識である。羣は雖にも小説家になれとは云はぬが、斯くとも凡ゆる人が、小説家と同じ眞面目な精神を以て、人生を學び、その事實を了解せんが爲に努力することを望む。

本紙に連載された「新夫人の打明話」は、女の筆として、可成大膽なものであった。殊に觀察した事情を出来るだけ正直に云つて退けやうとした態度は、近頃面白いと云つて可い。グダ時代から結婚後へ差して、男の心持や機子の異つて行く處が、頗るれるやうに書かれてある。男の冷嘲で、粗野で、我儘な服性とも云ふべきもののが、好く觀察されてある。成る程、あの種の女は、慥に感とも考へるだらうと思はせる。殊にあの筆者が、女子大學出身だといふ事實を結びつけてみると、其家に特別の心持が映はれる。恐らくあゝとした事を思ひ、隔ひ、惱んで居る女が、女子教育の最高府たる目白から出たといふ事だけでも、意味深長である。

「打明眼」の筆者は巧みに男を觀察した。併し、彼女が彼女自身を何う自觀して居るかと實せば、随くとも「打明眼」に於ては、何等の然うした兆候が見えない。彼女は自覺して居ない。女と云ふ者、自己と云ふ者には何一つの解釋すら與へて居ない。否、彼女はそんな餘裕を持つて居ない。たゞ著然に男の弱點を衝かうとして焦つて居る。正直だが了解がない。其面目だが批判力を伴つて居られぬ。私は「女だ」と云ふとばかりを知つて「女は女だ」と云ふ事を辨まへない。従つて自分の根本的弱點が解らない。乃ち妻となり母となつて自然に與へらるべき結果を避けて、娘であり戀人であつた昔を趁はうとする。矛盾があり苦悶が伴ふのは當然だと思ふ。然してこれは私が始めに云つた、小説家が人生に對すると同じ努力がこの筆者に缺けて居るからである。劉露は云へば、此の努力をする根本的素質が「女性」をそれ自身に興へられて居ないが



